
Girlfriend?

欄蛇

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Girlfriend?

【Nコード】

N1591I

【作者名】

欄蛇

【あらすじ】

あるところに

格好良くて、可愛い女の子がいました。その娘の名前は琉嘉と言います。よく男の子に間違えられることがあり、琉嘉は男の子みたいな顔と性格がコンプレックスでしたが、ある時そんな琉嘉の前に王子様が現れました。

1 s t

「好きですっ！付き合ってください！」

「え…？」

男勝りな自分にもやっと
彼氏が出来たのか…？

と、思った矢先…

「…っ男同士でも構いませんっ！」

「…は？」

「…っダメですか？」

「…」

人生で初めての異性からの告白は…ダメでした。

「…？先輩？」

「…俺は…俺はっ！
女だーっ！！」

そして俺は告白してきた
男を殴り飛ばして

その場から逃げました。

「「キヤーツ／／真崎先輩！／／」」

この声は

俺、真崎 琉嘉を呼ぶ声。俺は正真正銘“女”ですよ！？
男より女にモテる俺って何！？

叫ぶ女の子達に

一様手を振りながら
溜息を着く

「おい！真崎ー」

「何？」

「…？何キレてんの？」

「別に…」

「ふーん…」

今話し掛けてきたのは
クラスメートの男子達

「なあ真崎！
バスケしない？」

「…やる！」

ダムダムダムダム…スパ

ダムダム…スパ

コロコロ…

「…」

「なんでだー！？」

バスケット始めて10分

広がる点差

俺から全くボールを奪えない男達。

「も、もう一回！」

「…」

ダムダム…ダン！

コロコロコロ…

いつまでも

諦めない男子に疲れて

俺はダンクをした

「…」

リングにぶら下がる俺

「お前っ普通にダンク決めすぎだー！」

「…飽きた」

すたすたと歩いて

体育館をでようとする俺に

「ま、真崎っ！待ってくれっ」

そう言われ一度振り返る

「…？」

「ッ／／／」（かわっ！／／／）

「？何？」

「っ！ゴホンッ

えっと…あゝバスケット…そう！

バスケット部入んない！？」

「…俺、女」

「い、いや…そうじゃなくて……んと…」

「…？」

「……何でもないデス」

「…？んじゃ」

俺が体育館を出た後

男子達が

落ち込んだのは知らない

「…」

教室に戻る為廊下を歩く

が、周りが煩い

「「キヤーツ／／せんぱーい／／／」」

騒がしい

「／／／」

「…？」

俺の目の前まで来て

黙る女の子

はつきり言って

邪魔だ

「…何？」

「あっあのお／／／」

「
…」

「っ／／／」

いつまでも
もじもじしている女の子

俺が言葉を発するのを
待っている
逃げてしまった

「
…？」

何だっただんだ？

「
るうーかぁー！」

「
…？」

いきなり自分の名前を
呼ばれ振り返る

「
…ゆりっ」

俺が相手の名前を呼んだら
そいつは俺に抱き着いて来た

「
もーっいきなり

居なくならないですよ！」

この今俺に

文句を言っているのは

黒沢 ゆり

俺とは正反対の可愛い子で俺の幼なじみ

「悪い……」

あの変な告白を受けるまで

俺は学祭の時にやる見世物の応援団の手伝いをして
俺も団服を着ていた

ゆりに本当に悪かったと思っていると

「っ／／／やつやだな／／／
そこまで怒ってないからいいよっ／／／」

ゆりは何故か
顔を真っ赤にして否定し始めた

「……？」

「あっ／／／そっそうじゃなくてっ……」

「ゆり？」

「……ブツブツブツ」（嗚呼っダメ／／／そんな可愛い顔しないでっ
／／／）

「ゆーりー？」

「「キヤーツ／／琉嘉先輩っ／／／」

また女子達が増えて
葵の声を掻き消した

いつまでも自分の世界から
戻ってこない

ゆりを置いてまた何処かに
行ってしまう琉嘉だった

.

「……」（暇だ…しょうがない食堂に行ってケーキでも食つか…）

「っせっ…先輩！」

「…？」

不意に自分と呼ばれ
疑問に思い、首を傾げながら
声のする方を見る

「ッ／／／…／／／」

「…なに？」

振り返ってみたら
遂さっき

自分に告白をしてきた奴だった

「あつ／＼あのさっきはすみませんでした……」

「えっ……」

予想していなかった
言葉にちよつと焦る……

「まっ……まあ、
いつもの事だし……
別にいい……」

「あつでも言った事は
本気ですからっ！」

「……」

バキッ……

バタ……

「……………フン」

何なんだよッ

俺は女だっと思ってんのにつ
わざわざ謝りに来るから

ちよつと良い奴かもつて
思つた俺が馬鹿だつた

苛々しながら

ケーキをバクバク食べる

琉嘉にまわりは

全く声を掛ける勇氣もなかつた

「るうーかぁー！」

「……？」

「もう！一度ならず二度までも置いてく何て酷いよぉっ」

「……悪い………」

「／／困つた顔もかつこいいよぉ／／／」

「？何か言つたか？」

「ハッ！なんでもないよっ……
ちよつとした独り言だからっ……」

「？」

「そおいえばぁ

聞いたよ？また、告白されたんだって？

お・と・こ・の・子・に・！」

「……」

「もおーダメじゃんっ
ちゃんとOKしなきゃ！」

「いやっけどなッ？」

相手は俺の事を………」

さっきあつた事を

全部ゆりに話した

謝りに来たことも全て

「……その子馬鹿？」

「だと思う」

「ハア……」

だとしても殴る事ないじゃん」

「……」

「相手がもつと馬鹿に
なったら大変でしょ？」

心配する所間違っていると
思うのは俺だけか？

「兎に角！一様見てきて！」

ゆりの場合は

見に行く理由が違う気がするんだが………

だが

ゆりには逆らえず

仕方なくさっきの

BLヤローを見に行く俺

奴を殴った所に

行く

「ハア……」

殴った所まで行くと

奴がまだいた

だが

木に乗っかかり

寝て居るようだ。

「……」

俺

見に来た意味なくね？

全然平気そうだし……

無言で

奴の近くまで行く

良く見たら

結構綺麗な顔してるな…

「ジー…」

「…スウスウ…」

「ジー…」

「…あんまし
見つめないで下さいよ…／／／」

「…？」

「……照れますから／／／」

いきなり口を開いたと
思ったら
変な事を言い出す
コイツ

頭やつぱり

もっとダメになったみたいだ…；；

「さっきは殴って悪かった…」

「そっそんなっ

謝らないで下さいっ

悪いのは俺なんですから……っ」

あれ

言っただこと後悔してたのか？

まあ、何回も殴られたら嫌でもそう思うか

「……今度は最後まで聞いて下さいね。

確かに最初は間違えて仕舞いましたが、俺は……先輩が男だとか「あゝ？」だから最後まで聞いて下さいよっ……」

ゴホンッ

えーと……

性別は関係有りませんっ

先輩のバスケしてる時の真剣な眼差しに惹かれました！

好きですっ
」

「……それだけか？」

「え？」

「…それだけかと言ったんだ」

「それだけって……」

俺の愛の告白聞いてました？……」

「嗚呼」

つまりだ

結局こいつは男が好き何だろ？
だから俺には関係ないな

「……返事とかないんですか？」

「する必要はないと思うが？」

「…なんっ…」

「るかー！」

話しを遮れ、声の方を見るとゆりが走って来ていた

「もう！まだ話し終わってなかったの！？」

「……いや
今終わった」

「えっせんぱっ……」

その場を離れ様と歩き出す
あいつが何か言っているが

知らない

もう

会うこともないだろうし

まあ良いか

「……良いの？」

「……何が」

「あの後輩君よ」

「いいんじゃないか？」

「はあ……」(可哀相に……相手がこの子じゃあ……しょうがないか……)

2nd

「せんぱーい／＼
待って下さいよーっ」

「うるせえっ！
追いかけてくんなっ！」

どうも……俺は今この前俺を男だと思っ
て告白してきた奴に追われています。
何故こんな状況になったかと言いま
すと……

――…

「琉嘉あゝ」

あの後輩君とはどーなったのおゝ？」

ある日の放課後
由利がそんなことを唐突に問い掛けてきた

「……どうも何も
あれは俺には関係ないから」

「はあ……」（鈍感ちゃん……）

「そんなことより
良いのか？」

「なにが？」

「…もう直ぐ来るぞ」

「え？」

バタバタバタ

バンッ

「由ー利ーっ！」

「Σちな!？」

「由利く会いたかったよー由利は寂しかった？
そうかそうか！寂しかったか！俺も寂しかったよーっ
もう少しで由利不足で死ぬところだったんだよー」

由利を尋ねて来たこのマシンガントークをしているのは
俺達の一つ下の後輩で由利の彼氏…？の蓬田 稚夏ーヨモギ
チナツー君。

何かと理由を付けては
由利の話題をしたがり、稚夏君以外が関わるのを嫌う……まあ単純

に言えば

独占欲？

嫉妬？

みたいな感じですかね

「由利」

「ちな」

で

バカップル？ですね

バタバタバタ

バンッ

？

「テメエ…コラ！稚夏っ！

人のこと置き去りにしてんじゃねえーよっ！」

は？

ちよつと待て

今来たのはなんだ？

「あー久世じゃんっ！
どーしたのー？

まさかつ

由利に会いに来たのかっ！？

由利は俺のだっ

お前が親友だからって
絶対渡さないからなっ！」

……ハア

こいつはバカか？

嫌

元々か
↑

「稚夏うー

バカは休み休み言えよー？」

同感だな

「そんなあ

琉嘉ちゃんまでひどおい」

あれ？

俺口に出してたか？

「思いっきり出してるよお」

あらら

これは失礼

ん？

なんか忘れてるような…

「……琉……嘉せんぱい……？」

あ、

「うわぁー

こんなところで先輩に会えるなんてっ！

（普通に俺の教室なんだが）

先輩！

もうこれは運命ですよっ！

嬉しいなあ

先輩、好きですっ」

あー…

なんかイロイロなんか言ってるなあ……

これはもう

無視だな。

うん

ていうか

コイツさっき稚夏君と話してた時とキャラ違うくね？

二重人格か？

「…まあはっきり言つとそーですかね。

でも俺、先輩と居るときは本当の俺ですから！」

あれ？

また口に出してた？

気をつけねば…

「……せんぱい？

俺の話聞いてますかー？」

「え？」

なんか話ししてたか？

「…聞いてなかったんですね……俺…悲しいです…」

いじいじ

いじいじ

いじいじ

「…あー

もううつさいっ！

話し聞いてなかった位でいじけてるんじゃない？」

「くらいって…」

俺からしてみればたいしたことですよ…」

グスンッ

「久世くんったら」

そんなだと

キモすぎて嫌われちゃうよお？アハッ」

「……あゝ？

糞稚夏が意見してんじゃねえーよ」

恐っ！

てか

人格変わりすぎじゃね？

「もう

久世くんったらあ

恐いよお？そ・の・か・お！」

「……次口開いたら
命はないと思え」

「……」

「……フンッ」

「……琉嘉先輩」

「はい？」

「……今のは見なかった事にして下さい……」

え？

なんでだ？

まあ
いつか……

「……わかった」

「ありがとうございますっ／＼」

そして

前より更に久世は俺に懐いた（？）のでした。

――
……

「せんぱーい

何処に隠れて居るんですかあ？

出て来て下さいよー」

何故追ってくるんだよ

ほっといてくれれば
良いに

由利以外の人は
信用出来ない……

人は必ず裏切るから

その
裏切られた時に自分が
傷付かないように

俺は誰とも
関わり合いたくないんだ

そうでしょ？
お兄ちゃん

守れない約束なんてしないでよ

俺はずっと

待ってたんだよ？

……っ

.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1591i/>

Girlfriend?

2010年12月11日14時40分発行